

新技術導入によるパプリカ産地の育成

全国的に国産需要の高いパプリカの産地化が求められているなか、鹿行農林事務所 経営・普及部門ではJA茨城旭村と連携し産地化を図ってきました。当部門では、地域の基幹作物であるメロンとの作業競合が少ない新たな有利品目としてパプリカに注目し、栽培技術を生産者と共に試行錯誤し確立してきました。その結果、高収益品目として栽培戸数・面積が年々増加し、全国有数の産地として発展しました。

■ 新たな産地の育成 ■

平成19年に生産者6名でJA茨城旭村蔬菜部会パプリカ部が設立され、栽培技術の確立と生産拡大を図った結果、平成22年には生産者16名、栽培面積11haまで拡大しました。現在では、国内の主要産地として位置づけられ、日本一の夏秋産地となっています。

	生産者数 (名)	面積 (ha)	販売額 (百万)
H 2 0	1 0	4 . 4	1 3 0
H 2 1	1 5	8 . 1	1 6 2
H 2 2	1 6	1 1 . 0	1 3 0

パプリカの普及状況 (JA茨城旭村蔬菜部会)



天敵講習会の様子



品種比較試験

■ 産地に合った栽培技術の確立 ■

パプリカは着果してから収穫するまで60~70日かかります。そのため、安定した収量を確保するため、定植時期や整枝法などの調査を行い、当産地に適した栽培体系を確立しました。栽培講習会や月1回全戸を巡回し、管理作業などを指導したことで、整枝仕立て法の統一につながりました。また、近年アザミウマ類が媒介する黄化えそ病(TSWV)が問題となっています。そこで、黄化えそ病耐病性品種の比較試験を行い、産地に合った品種を選定し導入しました。

■ IPM技術を取り入れた防除法の確立と普及 ■

近年、難防除微小害虫“アザミウマ類”による品質低下や黄化えそ病の発生を防ぐことが急務の課題となっており、粘着シートや天敵導入等のIPM技術を取り入れた防除に着目しました。特に、天敵を導入するにあたり、現地巡回等で天敵の特徴・使用方法・使用できる農薬の指導を徹底し、平成20年度にはJA茨城旭村蔬菜部会パプリカ部の全員が、天敵スワルスキーカブリダニを導入しました。生産者も、天敵導入によるアザミウマ被害の軽減効果を実感しています。

IPM技術を用いた防除技術の確立により、安全・安心なパプリカを安定生産する産地を育成していきます。



粘着シート設置風景